

宮沢賢治の心象スケッチにみるオノマトペ (その2)

河原修一

5. オノマトペの意味

意味とは、人間が状況のなかで或るものごとを関係づけて措き定めることである。言語以前の段階では、様々な連想による漠然とした心象（イメージ）である。或るものごとに対する心象が反復され定型化されれば、観念となる。個人的な観念もあれば、普遍に通じる直観的な観念もある。或るものごとに対する様々な個人的な心象に共通する心象が、社会的に合意されれば、概念となる。ただ、概念の形成に際しては、様々なレベルの象徴、記号、言葉が関わる。(心象や観念の形成に際して、様々なレベルの象徴が関わることもある。)

象徴、記号、言葉は、それぞれ包含関係（原初的象徴 \supset 記号 \supset 言葉）にある。言葉には、原初的象徴や記号の機能のレベルにとどまるものもある。また、言葉を超えた精神的象徴がある。

言葉には、(1)声の表出による身体象徴レベル（笑い声の言語化など）、(2a)声の表出の反復定型化による身体記号レベル（指示語・応答語など）、(2b)音の模倣による身体記号レベル（擬音語）、(2c)共感覚による身体記号レベル（擬態語）、(3)一般記号（符号）レベル（固有名など）、(4a)前概念（擬似概念^(註7)）による言語記号レベル（幼児の用語など）、(4b)概念による言語記号レベル（常用の語）、(5)概念構成による言語記号体系レベル（常用の談話・文章）、(6)概念によらない象徴的言語記号レベル（語感など）、(7)概念によらない象徴的言語記号体系レベル（レトリックなど）がある。

オノマトペには、(1)(2b)(2c)(6)のレベルがある。オノマトペの派生や転成、意味の転化などによる(3)(4a)(4b)のレベルは、ここでは考察の対象外とする。

したがって、オノマトペによって示される意味は、(4b)のレベルに代表されるような社会的な約束に基づく記号で示すものと示されるものとの恣意的（任意的）な関係によらないで、記号で示す子音・母音などの音感によって示される（いわば自然的・必然的な関係による）意味である。オノマトペの音象徴と呼ばれている。

ここで、すでに「1. オノマトペとは」で言及したような方法（一般的なオノマトペの分布と比較による帰納法^(註8)）により、母音・子音・音便・清濁などの音象徴の意味を仮設する^(註9)。すでに「1. オノマトペとは」で言及した音感（音象徴の意味）と部分的に重複するが、併せて簡潔にまとめて述べる。結果的に、音象徴の意味と調音の仕方との間には、ある程度の相関関係が認められる。

まず、母音の音感（音象徴の意味）について述べる。

5つの母音は、[a] [o] [e] [u] [i] というソノリティー（音量）の順に（調音するときの口の大きさの順に）、[a] 音が開放的（拡散的）で全体（広範囲）にわたる（拡がる）イメージであるのに対し、[o] [e] [u] [i] 音が順により閉鎖的（隠匿的）で部分に限定される（包み込まれる）イメージである。

[a] 音は、開放的（全体的・拡散的）な意識によって、安楽さや許容性を示す一方、秩序のなさから無反省・無遠慮を示すこともある。

[o] 音も、[a] 音ほどではないが、安楽さや許容性を示すことがある。

[o] [e] [u] [i] 音は、閉鎖的（部分的・隠匿的）な意識によって、秩序だった顧慮や反省、時には罪意識を示す一方、くぐもった隠微な秘匿を示すこともある。

[o] [u] 音は、円唇母音で、調音するときの口の形から、円形（球形）または筒状、膨れのイメージを示すこともある。

[e] 音は、二重母音の短母音化であることから、屈折（屈曲）した（歪な）イメージを示すこともある。

[i] 音は、狭母音であることから、鋭い（狭い）イメージを示すこともある。

宮沢賢治の心象スケッチから、例を挙げてみる（以下同じ）。

ときどき(1) <u>ばつ</u> とたつ雪と	(小岩83)
鳥がね～(2) <u>ばあ</u> つと空を通ったの	(青森178)
あの(3) <u>がらん</u> とした町かどで	(オホ189)
すぎごけの表面が(4) <u>かさかさ</u> に乾いてゐるので	(鎔岩241)
あんまり(5) <u>がさがさ</u> 鳴るためだ	(風林165)
すつかりぬれた 寒い (6) <u>がたがた</u> する	(小岩96)
風が みんなの(7) <u>がやがや</u> したはなし声にきこえ	(鈴谷204)
かしははいちめん(8) <u>さらさら</u> と鳴る	(風林168)
洋傘は～しばらく(9) <u>ばたばた</u> 言つてから～倒れたのだ	(風景と219)
曠原風の情調を (10) <u>ばらばら</u> にするやうなひどいけしきが	(鎔岩240)
口をすゝいで(11) <u>さつぱり</u> して往かう	(白い172)

[a] 音の音感に着目すれば、(1)は拡散的な広がり、(2)は広範囲にわたる動き、(3)は全体的な広がり、(4)は表面の全体にわたるさま、(5)はあちこちで広範囲に起こる音、(6)は体全体に起こる震え、(7)はあちこちで広範囲に起こる声、(8)は全体にわたる音、(9)は開放的な音、(10)は拡散的で無秩序なさま、(11)は身体全体に拡がる爽やかさを示す。

(12) <u>そつ</u> と見てごらんさい	(樺太197)
鳥の声 その音が(13) <u>ぼつ</u> とひくくなる	(小岩78)
耳(14) <u>ごう</u> ど鳴つて	(青森178)

水は濁つて(15) どんどんながれた (小岩86)
 下では水が(16) ごうごう流れて行き (風景と218)
 風は(17) どうどう空で鳴つてるし (宗教215)
 からだの丈夫なひとは(18) ごろつとやられる (鼎226)
 ゴムのまり～受けかねて(19) ぼろつとおとす (芝生106)
 (20) ことことと寂しさを噴く暗い山に (不貪211)
 松倉山の木は～あの(21) ごとごといふのがみんなそれだ (風の223)
 雲が～(22) ころころまるめられたパラフキンの団子になつて (真空50)
 鶯も(23) ごろごろ啼いてゐる (小岩72)
 えりをりのシャツや(24) ぼろぼろの上着をきて (過去235)
 小さな蚊が～また(25) ほのほのと吹きとばされ (オホ191)
 陽がいつか(26) こつそりおりてきて (小岩79)

[o] 音の音感に着目すれば、(12)は筒状の空気の動き、(13)はこもった音、(14)は筒状の場所の中でもる音、(15)は筒状の塊の動き、(16)(17)は筒状の塊の動きの音、(18)は球状の塊の回転のイメージ、(19)は球状のものの回転と落下、(20)(21)はくぐもった音、(22)は丸い形状、(23)はくぐもった声、(24)は幾つかの塊に千切れて丸まったさま、(25)はゆるやかな弧を描くさま、(26)は秘密めいたさまを示す。

わたくしは(27) でこぼこ凍つたみちをふみ (屈折20)

[e] 音の音感に着目すれば、(27)は斜めに(いびつに)へこんださまを示す。なお、[o] 音の音感に着目すれば、(27)は筒状の凹凸のうちの突出したさまを示す。

(28) しゆつと擦られたマツチだけれども (霧と105)
 (29) すつととられて消えてしまふ (真空59)
 (30) ずつと遠くでは (小岩75)
 (31) ずうつと遠くのくらいところでは (小岩72)
 威勢よく～(32) ふつと鼻を鳴らせ (小岩80)
 みちが(33) ぐんぐんうしろから湧き (小岩88)
 馬車は(34) ずんずん遠くなる (小岩72)
 あかるい雨の中で(35) すうすうねむる (小岩95)
 ほんたうの鷹が(36) おうおう風を截る (小岩91)
 (37) うるうるしながら苹果に噛みつけば (鎔岩242)
 雲は(38) くるくる日は銀の盤 (青い107)
 みんな(39) ぐるぐるする (青森178)
 雉子は(40) するするながれてゐる (小岩84)
 沼はつめたく(41) ぬるぬるした蕁菜^{じょう}とから組成され (雲と212)

つめくさ～舶来の草地～(42) <u>ふくふく</u> してあたたかだ	(習作40)
泥炭がなにか(43) <u>ぶつぶつ</u> 言つてゐる	(真空58)
癢せた肩を(44) <u>ぶるぶる</u> してるにちがひない	(真空53)
農夫が立ち(45) <u>つくづく</u> とそらのくもを見あげ	(小岩89)
禁猟区のためでない (46) <u>ぎゅつぐい</u>	(小岩78)
雀～田にはひり (47) <u>うるうるうる</u> と飛び	(グラ124)

[u] 音の音感に着目すれば、(28)は狭く細長い軌道の周りに生じる音、(29)は逆円錐状の動き、(30)(31)(34)は筒状または逆円錐状の視界の動き、(32)(35)(36)は狭い筒状の空気の動く音、(33)は筒状または円錐状の動き、(37)は涙が流れる動きに伴う心情、(38)は回転するイメージ、(39)は眩暈めまいに似た心情、(40)(47)は狭い湾曲する筒状の動き、(41)は筒状の触感、(42)は膨らみ、(43)は狭い筒状の空気の動きに伴う声と鬱屈した心情、(44)は狭く短い軌道の周りの空気の震えと怯えた心情、(45)は筒状に延びる視界の動き、(46)は口を窄めてすぼ(狭い嘴の間から)出される鳥の声を示す。

(48) <u>きつ</u> と口をまげてわらつてゐる	(風林166)
ひのきも(49) <u>しん</u> と天に立つころ	(春と31)
馬は(50) <u>ピン</u> と耳を立て	(小岩71)
大きな紺色の眼を(51) <u>りん</u> と張つて	(小岩97)
あたまの奥の(52) <u>キンキン</u> 光つて痛いもや	(習作40)
なみだをふいて(53) <u>きちん</u> とたて	(宗教216)

[i] 音の音感に着目すれば、(48)は短く鋭い直線的な動き、(49)は直線的な動きによる緊張感、(50)(51)は短く鋭い直線的な動きによる緊張したさま、(52)は鋭い感覚、(53)は緊張感のある折目正しい態度を示す。

次に、子音の音感(音象徴の意味)について述べる。

[k] 音は、乾いた硬質なイメージを示す。

[s] 音は、滑らかなイメージ(滑らかさ、スムーズさ)を示す。何の障害(問題)もないこと、物事にこだわらないさまを示すこともある。

[t] 音は、乾いた(抵抗のない)断続的な響きや動きを示す。

[ts] 音は、抵抗のない直線的な動きを示す。尖ったさまとが(態度、感情)を示すこともある。

[n] 音は、粘り気のあるゆっくりした動きを示す。緩慢で怠惰なさまを示すこともある。

[h] 音は、息を吐き出す音やさまを示す。様々な感情を示すこともある。

[p] 音は、弾はじけたり突き出たりする音や動きを示す。水しぶきの音、突出による膨れ上がりはを示すこともある。

[m] 音は、籠^{こも}っている(鬱屈している)イメージを示す。籠^{こも}っている(鬱屈している)ものが開放されて、拡がったり、上昇したり、膨れ上がったたりするイメージを示すこともある。

[j] 音は、柔らかでゆっくりした動きを示す。軟弱なさまを示すこともある。

[r] 音は、滑らかに回転する(流れる)イメージまたは張りのあるイメージを示す。

[w] 音は、喚^{わめ}き・叫びの声や大きな揺れを示す。喧騒や混雑を示すこともある。

[kj] 音は、甲高い声や音、軋^{おし}み、締め付けるさま、落ち着かないさまを示す。

[ʃ] 音は、噴出する音、摩擦(抵抗感)を受けながらも通り抜けるさま、弾力感、湿り気を示す。水しぶきが弾けて飛び散る音、勢いよく噴出するさま、勢いなく漏れ出るさまを示すこともある。

[tʃ] 音は、わずかな金属音や水しぶきの音や小動物の声、わずかなさまを示す。わずかな所までまとまっているさま、わずかな乱れが全体にわたるさまを示すこともある。

[nj] 音は、ぬめりのある細長いものの動きを示す。

[hj] 音は、空気が狭い軌道をすり抜ける音や身軽な動きを示す。

一般的に、無声音と有声音の対応(清濁の対立)は、軽重、美醜、聖俗などの話し手の判断・評価を示し、後者はマイナス評価を表すことが多い。ただし、勢力(勢い)の大小という判断・評価を示すとき、有声音(濁音)がプラス評価を表すこともある。

[g] 音は、重苦しく濁った鈍い(醜い)イメージ、抵抗を受けながら進むイメージを示す。勢いのあるさまを示すこともある。

[z] 音は、耳障りな(不快な)音や障害(抵抗)の多いさまを示す。水や砂の音、恐怖などの感情、障害に立ち向かうさまを示すこともある。

[d] 音は、重く濁った(抵抗を押しつけた)断続的な響きや動きを示す。

[b] 音は、大きな音、重い音、勢いのある動きを示す。水しぶきの音、膨れ、無秩序な(まとまりのない)さまを示すこともある。

[gj] 音は、野太い声、強く締め付けるさま、驚愕・恐怖の感情を示す。

[ʒ] 音は、大きな金属音、分量の多い砂・水などの音や動きを示す。無秩序なさまを示すこともある。

(48) <u>きつ</u> と口をまげてわらつてゐる	(風林166)
あたまの奥の(52) <u>キンキン</u> 光つて痛いもや	(習作40)
すぎごけの表面が(4) <u>かさかさ</u> に乾いてゐるので	(鎔岩241)
なみだをふいて(53) <u>きちん</u> とたて	(宗教216)
わたくしは(54) <u>かつきり</u> みちをまがる	(小岩101)

[k] 音の音感に着目すれば、(48)は硬質で鋭角的なイメージ、(52)は乾いた硬質な(金

属的なイメージ、(4)は乾いたイメージ、(53)は几帳面なイメージ、(54)は几帳面で鋭角的なイメージを示す。

- (29) すつととられて消えてしまふ (真空59)
(12) そつと見てごらんささい (樺太197)
あかるい雨の中で(35) すうすうねむる (小岩95)
かしははいちめん(8) さらさらと鳴る (風林168)
雉子は(40) するするながれてゐる (小岩84)
沼地を～馬が～(55) すばすば涉つて進軍もした (小岩90)
こんな(56) さつぱりした雪のひとわんを (永訣157)

[s] 音の音感に着目すれば、(29)は何の障害もないスムーズな動き、(12)は密やかで滑らかなさま、(35)は何の障害もなくスムーズで安心なさま、(8)(40)は何の障害もなくスムーズなさま、(55)は何の障害もなく順調に進むさま、(56)は不純物のないさまを示す。

- すつかりぬれた 寒い (57) がたがたする (小岩96)
(58) ことことと寂しさを噴く暗い山に (不貪211)
松倉山の木は～あの(59) ごとごといふのがみんなそれだ (風の223)

[t] 音の音感に着目すれば、(57)は断続的な動き(震え)、(58)(59)は断続的に響く音を示す。

- 農夫が立ち(60) つくづくとそらのくもを見あげ (小岩89)
泥炭がなにか(61) ぶつぶつ言つてゐる (真空58)

[ts] 音の音感に着目すれば、(60)は先鋭的・集中的・直線的な動き(眼差し)、(61)は尖ったさま(発声、態度、感情)を示す。

- 沼はつめたく(41) ぬるぬるした蓴菜^{じかん}とから組成され (雲と212)

[n] 音の音感に直目すれば、(41)は粘り気のあるさまを示す。

- 威勢よく～(32) ふつと鼻を鳴らせ (小岩80)
(62) ふん いつものとほりだ (小岩77)
なるほど (63) ふんふん (真空50)
つめくさ～舶来の草地～(42) ふくふくしてあたたかだ (習作40)

〔h〕音の音感に着目すれば、(32) (62) (63) はいずれも鼻からの息の吐き出しで、(32)は威勢のよさ、(62)は日常性への飽き(小馬鹿にした感じ)、(63)は相槌を示す。(42)は安堵感(安らぎ)を示す。

ときどき(1) ばつとたつ雪と (小岩83)
馬は(50) ピンと耳を立て (小岩71)
ゴムのまり～受けかねて(19) ぼろつとおとす (芝生106)
雨は(64) ばちばち鳴つてゐる (休息42)
(65) ぼつかりぼつかりしづかにうかぶ (真空50)

〔p〕音の音感に着目すれば、(1)は弾けとぶさま、(50)は弾力的な動き、(19)は弾けるような動き、(64)は弾ける音、(65)は突き出たさまを示す。

助手は～油のない赤髪を(66) もじやもじやして～睡つてゐる (青森175)
金いろの苹果の樹が (67) もくりもくりと延びだしてゐる (真空51)

〔m〕音の音感に着目すれば、(66)は籠った感じ、(67)は籠ったものが開放されて上昇する感じを示す。

いそしぎが(68) よちよちとはせて逃げ (オホ195)
雲はさつきから(69) ゆつくり流れてゐる (樺太199)
山は(70) ほんやり (雲の38)

〔j〕音の音感に着目すれば、(68)は稚拙な(未熟な)動き、(69)は遅い動き、(70)は反応の遅いさまを示す。

大きな紺色の眼を(51) りんと張つて (小岩97)
すすきは(71) きらつと光つて過ぎる (雲と212)
雲が(72) ぎらつとひかつかくらゐだ (小岩68)
向ふの並樹を(73) くらつと青く走つて行つたのは～徽章だ (小岩81)
からだの丈夫なひとは(74) ごろつとやられる (昴226)
馬車が～(75) ひらつとわたくしを通り越す (小岩70)
ゴムのまり～受けかねて(19) ぼろつとおとす (芝生106)
(37) うるうるしながら苹果に噛みつけば (鎗岩242)
背中(76) きらきら燦いて (蠕虫64)
縮れて雲は(77) ぎらぎら光り (第四229)
太陽が(78) くらくらまはつてゐるにもかゝはらず (真空58)
雲は(79) ぐらぐらゆれて馳けるし (過去235)

雲は(38)くるくる日は銀の盤 (青い107)
 みんな(39)ぐるぐるする (青森178)
 雉子は(40)するするながれてゐる (小岩84)
 沼はつめたく(41)ぬるぬるした葦菜とから組成じゅうけんされ (雲と212)
 雀～田にはひり (47)うるうるうるうると飛び (グラ124)

[r] 音の音感に着目すれば、(51)は張りのあるさま、(71)(72)(73)(74)(75)(76)(19)(78)(38)(39)は滑らかに回転するイメージ、(37)(77)(79)(40)(41)(47)は滑らかに湾曲する(流れる)イメージを示す。

(28)しゆつと擦られたマツチだけれども (霧と105)
 しぶきや雨に(80)びしやびしや洗はれてゐる (山巡125)
 野はらもはやしも(81)ほしやほしやしたりくす動んだりして (くら21)
 (82)ちやんと顔を見せてやれ (犬148)
 幹や枝が(83)ごちやごちや漂ひ置かれた (オホ193)
 みぞれは(84)びちよびちよふつてくる (永訣156)

拗音(無声音)の音感に着目すれば、(28)は狭い軌道に沿って噴出する音、(80)は水しぶきが弾けて飛び散る音、(81)は雪がぶつかるさま、(82)はまとまり、(83)は乱れ、(84)はわずかな水しぶきによる乱れを示す。

耳(14)ごうど鳴つて (青森178)
 下では水が(16)ごうごう流れて行き (風景と218)
 あたらしく(85)ぎくつとしなければならぬほどの (オホ185)
 からだの丈夫なひとは(18)ごろつとやられる (昴226)
 あの(3)がらんとした町かどで (オホ189)
 あんまり(5)がさがさ鳴るためだ (風林165)
 すつかりぬれた 寒い (6)がたがたする (小岩96)
 風が みんなの(7)がやがやしたはなし声にきこえ (鈴谷204)
 鶯も(23)ごろごろ啼いてゐる (小岩72)
 みちが(33)ぐんぐんうしろから湧き (小岩88)
 胃袋はいて(86)ぎつたぎた (原体122)

[g]音の音感に着目すれば、(14)(16)は大きく重く響く音、(85)は重く軋む感情、(18)は重さ、(3)は大きさ、(5)は鈍い音、(6)は大きな動き(震え)、(7)は大きな(分量の多い)声、(23)は低い声、(33)は勢いのあるさま、(86)は重苦しく濁った醜いイメージを示す。

(30)ずつと速くでは (小岩75)

(31) ずうつと速くのくらいところでは (小岩72)
馬車は(34) ずんずん速くなる (小岩72)

[z] 音の音感に着目すれば、(30)(31)はもともと障害(抵抗)に立ち向かうさまを示すことから遠くにあるさまを示し、(34)は障害(抵抗)に立ち向かうさま(勢いよく進行するさま)を示す。

水は濁つて(15) どんどんながれた (小岩86)
風は(17) どうどう空で鳴つてるし (宗教215)
わたくしは(27) でこぼこ凍つたみちをふみ (屈折20)

[d] 音の音感に着目すれば、(15)は重く濁った(抵抗を押しのかた)断続的な動き、(17)は重く濁った断続的な響き、(27)は断続的な動きのイメージを示す。

鳥がね～(2) ばあつと空を通つたの (青森178)
曠原風の情調を (10) ばらばらにするやうなひどいけしきが (鎔岩240)
鳥の声 その音が(13) ほつとひくくなる (小岩78)
えりをりのシャツや(24) ほろほろの上着をきて (過去235)
ほんたうの鷹が(36) ふうふう風を載る (小岩91)
泥炭がなにか(43) ぶつぶつ言つてる (真空58)
わたくしは白い雑囊を(87) ぶらぶらさげて (小岩87)
山は(70) ぼんやり (雲の38)

[b] 音の音感に着目すれば、(2)は勢いのあるさま、(10)(24)は勢いのある動きによる無秩序なさま、(13)(43)は重く低い声、(36)は勢いのある動きによる重い音、(87)(70)はまとまりのないさまを示す。

禁猟区のためでない (46) ぎゅつくぎゅつく (小岩78)
助手は～油のない赤髪を(63) もじやもじやして～睡つてる (青森175)

拗音(有声音)の音感に着目すれば、(46)は野太い声、(63)は無秩序なさまを示す。

最後に、音便などの音感(音象徴の意味)について述べる。

すでに「1. オノマトベとは」で言及したように、促音は時間的な短さ・速さ、緊張感など、撥音は瞬間、余韻、共鳴、共感など、長音化は時間的な長さ・遅さ、慣性的続行、注意深さ、思い入れ、強調など、「り」は一般的なまとまり、主体をめぐる環境・状況などを示す。「2. オノマトベの分布」で挙げた例を参照されたい。

6. 独創的なオノマトペ

文脈的あるいは表現的に独創的なオノマトペをいくつか取り上げてみる。

オノマトペを含む慣用的な連語とは異なる、意表を衝く(時には矛盾した)連語の表現によつて、非日常的で斬新な意味を示す。「2. オノマトペの分布」で挙げた例のうち、☆印を付したものである。一例を挙げる。

(48) きつと口をまげてわらつてゐる

(風林166)

「きつ」は、状態の共起や状況の連動を示す「と」で受ける。[k]音は硬質で鋭角的なイメージ、[i]音は短く鋭い直線的な動き、促音は時間的な短さ・速さ、緊張感を示す。「きつ」は、硬質で鋭角的で短く鋭い瞬時の緊張した直線的な動きを示す。「口をまげて」に係るのは理にかなっているが、「わらつてゐる」に係るのは矛盾している。この違和感によって、「佐藤伝三郎」という人物の表情だけでなく性格(個性)までも表現して(伝えて)いる。

慣用的に用いられているオノマトペとは異なる、賢治の造語によるオノマトペによつて、非日常的で斬新な意味を示す。「2. オノマトペの分布」で挙げた例のうち、◎印を付したものである。一例を挙げる。

野はらもはやしも(81) ぼしやぼしやしたり^{くす}勤んだりして

(くら21)

[p]音は弾ける水しぶきの音、[o]音は閉鎖的で包み込まれるくぐもったイメージ、[ʃ]音は抵抗感を受けながらも通り抜ける水しぶきや湿り気、[a]音は全体にわたる拡散的な動きを示す。ABAB形式であるから、一般的継続を示す。「ぼしやぼしや」は、弾けて噴きつける雪が周囲の風景に包み込まれるようにくぐもって抵抗感を受けながらも全体にわたってぶつかつてくることが続くさまを示す。東北の風土を示すとともに、賢治の(暗鬱な)心象風景をも表している。

独創的なオノマトペによつて示される意味(表現される内容)について述べる。

植物のもつ(時には悪となる)生命力が示される。一例を挙げる。

金いろの^{りんご}苹果の樹が(67) もくりもくりと延びだしてゐる

(真空51)

賢治の造語によるオノマトペである。「と」で受ける。[m]音は籠ったものが開放されて拡がったり上昇したり膨れ上がったたりするさま、[o]音は球形または筒状の膨れ、[k]音は乾いた硬質なイメージ、[u]音は罪意識によるくぐもった隠微な秘匿、「り」は苹果の樹をめぐる状況を示す。ABRABR形式であるから、一般的断続を示す。

「もくりもくり」は、籠ったもの(生命力の悪)が開放されて拡がり筒状に上昇し、球形のもの(苹果)を膨れさせ、表面は乾いて硬質でありながら、内面は罪意識によるくぐもった隠微な秘匿が隠され、断続的に生長するさまを示す。この前後の文脈で、「金皮のまゝたべた」ため「りんごが中つたのださう」で「ゾンネンタールが没くなつたさう」だと表現されている。生命体無意識(末那識)が象徴されていると考えられる。

動物のもつ生命感あふれるリアルな動きが描写される。一例を挙げる。

雀 掠奪のために田にはひり (47) うるうるうるうると飛び (グラ124)

賢治の造語によるオノマトペである。「と」で受ける。[u]音は罪意識によるくぐもった隠微な秘匿と狭い筒状の通路、[r]音は湾曲する(流れる)動きを示す。ABABABAB形式であるから、長時間の一般的継続を示す。「うるうるうるうる」は、隠微な罪意識を秘匿したずる賢さと狭い湾曲する筒状の動きを示す。ここでも、生命体無意識(末那識)が象徴されていると考えられる。

人間の表情や態度の描写は、同時に心情や性格、精神性などの内面をも照射している。一例を挙げる。

髪がくろくてながく (88) しんとくちをつぐむ (春光33)

「しん」は、状態の共起や状況の連動を示す「と」で受ける。[ʃ]音は摩擦(抵抗感)を受けながらも通り抜けるさま、[i]音は直線的な動きによる緊張感、撥音は瞬間、余韻、共鳴を示す。AN形式「しん」は、一瞬の緊張のなかに静寂の余韻を示し、余情を湛える。若い女性の生命力に満ち溢れた美しさが、その精神性と相俟って、或る物想いを湛えた静けさとなって、沈黙のなかに、賢治に向かって声ならぬ声として訴えてくるものがある。賢治は、「いつたいそいつはなんのぎまだ」と求道者としての裏切りに憤りながらも、「おおこののがさ青さつめたさ」と自らの煩惱に懊惱する。生命体無意識(末那識)に脅かされる。

鉱物や自然物、人工物、霊的なものもまた一種の(次元の異なる)生命力を具えたものとして表現される。それぞれ例を挙げる。

泥炭がなにか (43) ぶつぶつ言つてゐる (真空58)

山は (70) ぼんやり (雲の38)

向ふの並樹を (73) くらつと青く走つて行つたのは～人馬の徽章だ (小岩81)

すきとほるものが～また (89) ほのほのとかゝやいてわらふ (小岩86)

[b] 音は重く低い声、まとまりのないさま、[ts] 音は抵抗のない直線的な動き、尖ったさま(態度、感情)、[u] 音は閉鎖的(部分的・隠匿的)な意識、円形(球形)または筒状、膨れを示す。ABAB形式であるから、一般的継続を示す。「ぶつぶつ」は、狭い筒状の空気の動きに伴う重く低い声と鬱屈した心情(膨れてまとまらない感情が尖った態度となる)を示す。泥炭の置かれた状況への不平・不満が表される。

[b] 音はまとまりのないさま、撥音は瞬間、余韻、共鳴、共感、[j] 音は柔らかでゆっくりしたさま、「り」は山をめぐる環境・状況を示す。ANBR形式であるから、余韻のある一般的停止を示す。「ほんやり」は、まとまりのない意識のなかで瞬間的に周囲の状況と共鳴し共感して柔らかでゆったりしていることを示す。「風」「農具」「岩頸」「岩鐘」「四本杉」「雁」はみな調和していて、「雲の信号」が「禁慾のそら高く掲げられて」いた「時間のないころのゆめをみて」いるからである。

[k] 音は乾いた硬質なイメージ、[u] 音は閉鎖的(隠匿的)で部分に限定されるイメージ、[r] 音は滑らかに回転する(流れる)イメージまたは張りのあるイメージ、[a] 音は開放的(拡散的)で全体(広範囲)にわたる(拡がる)イメージ、促音は時間的な短さ・速さ、緊張感を示す。ABT形式であるから、開始を示す。「くらつ」は、部分に限定される乾いた硬質なもの(徽章)が滑らかに湾曲して流れ、瞬時に張りのある光を広範囲に放ち始めるさまを示す。「並樹」「騎手」「人馬」が一体となった大気の振動が「徽章」の一瞬の煌めきに象徴される。

[h] 音は息を吐き出す音やさま、安心感、[o] 音は円形(球形)または筒状、膨れ、安楽さや許容性、[n] 音は粘り気のあるゆっくりした動き、[b] 音は膨れ、まとまりのないさまを示す。ABA'B形式であるから、一般的継続を示す。「ほのほの」は、安楽さや許容性に満ちた(膨らんだ)安心感のあるゆったりとしたさまを示す。「一列わたくしのあとからくる」「すきとほるもの」は「ひかり」「かすれ」「うたふやうに小さな胸を張る」「すあしのこどもら」である。幼児期に夭折して天上界に住む霊的な存在であると考えられる。天上界と地上界(現実界)が調和して、生命宇宙界として一体化している。

東北の風土への愛着(愛憎)が示される。一例を挙げる。

首を垂れておとなしく(90)がさがさした南部馬

(風景と217)

[g] 音は重苦しく濁った鈍い(醜い)イメージ、勢いのあるさま、[a] 音は開放的(全体的・拡散的)な意識による安楽さや許容性、秩序のなさによる無反省・無遠慮、[s] 音は何の障害(問題)もないこと、物事にこだわらないさまを示す。ABAB形式であるから、一般的継続を示す。「がさがさ」は、勢いはあるが鈍く醜く、物事にこだわらないががさつなさまを示す。一般に、マイナス評価を表すことが多いが、賢治はむしろ「南部馬」の鈍重さ、屈託のないがさつさ(無遠慮さ)、馬鹿正直さに、自分自身を含む南部の人々の性情や東北の風土を投影して、愛着を覚えているのである。

最後に、賢治の価値意識としての普遍精神(生命宇宙観)とその理想に矛盾する精神の懊悩が示される例をいくつか挙げる。

ひのきも(49)しんと天に立つころ	(春と31)
すすきは(71)きらつと光つて過ぎる	(雲と212)
背中(76)きらきら ^{かがや} 燦いて	(蠕虫64)
雲が(72)ぎらつとひかつたくらぬだ	(小岩68)
縮れて雲は(77)ぎらぎら光り	(第四229)

「しん」は、状態の共起や状況の連動を示す「と」で受ける。〔し〕音は摩擦(抵抗感)を受けながらも通り抜けるさま、〔i〕音は直線的な動きによる緊張感、撥音は瞬間、余韻、共鳴を示す。AN形式「しん」は、一瞬の緊張のなかに静寂の余韻を示し、余情を湛える。大地の自然がそのまま宇宙につながる清冽で聖なる心象が表される。賢治の自然即宇宙という普遍宇宙(生命宇宙)観が示される。賢治の心象のなかで、東北の大地に生えるひのきは天に向かって伸びて宇宙を貫き、無音のなかに精神的な宇宙の声の響きを聴く。ひのきという限定された垂直的ないのちの動きが、宇宙全体に交響する。

「きらつ」は、「と」で受ける。〔k〕音は乾いた硬質なイメージ、〔r〕音は滑らかに回転するイメージ、各母音は広がり方を示す。ABT形式「きらつ」は、輝きが開始して瞬時に終る、時間的な短さ・速さ、緊張感を示す。限定された輝きが回転しながら、瞬時に全体にわたる。すすきが風になびいて陽の光を受けるさま、一瞬すすきが反転してそれに伴って輝きも反転してまた消えるさまが、視点の転換による心象として表される。いのちの煌めきが示される。

「きらきら」は、「と」で受けるとは限らない。ABAB形式「きらきら」は、限定された輝きが回転しながら(湾曲しながら)全体にわたる一般的継続を示す。明るい陽の光を浴びて、水のなかの蠕虫の背中が輝きを放ち、その輝きが回転しながら周囲に広がり続ける心象が表される。太陽と蠕虫が呼応したいのちの燦めきの継続が示される。

「ぎらつ」は、「と」で受ける。〔g〕音は重苦しく濁った鈍い(醜い)イメージ、抵抗を受けながら進むイメージを示す。ABT形式「ぎらつ」は、鈍く重苦しい輝きが開始して瞬時に終る、時間的な短さ・速さ、緊張感を示す。「わたくしはずるぶんすばやく汽車からおりた そのために」から続く表現で、停車場ですばやく汽車から降りたために、頭上の雲が一瞬反転して、薄暗いどんよとした東北の空のなかで鈍く重い光を放ってまた視野から消えるさまが、視点の転換による心象として表される。自然(宇宙、生命)の暗鬱な側面が、賢治自身の深層心理に潜む暗鬱な心情とともに、示される。

「ぎらぎら」は、「と」で受けるとは限らない。ABAB形式「ぎらぎら」は、鈍く重苦しいイメージが閉鎖的に部分に限定されながら、抵抗を受けながら回転する(湾

曲する)イメージとなって、全体に及ぶ一般的継続を示す。賢治自身の深層心理に潜む煩惱の蠢き、修羅の争闘する自尊心が、嫉妬や憎しみの光となって、暗鬱な空のなかの醜く縮れた雲の放つ鈍く重苦しい輝きの継続する心象として、表される。雲は、天と地との間にあって、清冽で聖なる天(精神の高み)を覆う煩惱あるいは闘争心(修羅の心)を象徴する。

7. 結語

オノマトベはもともと発声における調音の仕方や聴覚的印象と結びついていただけに、記号論理からはみ出して、身体感覚に基づく連想(共感覚)によって、表現されることが多い。

賢治の心象スケッチでは、身心を貫く共感覚に基づくオノマトベによって、日常風景と心象風景が二重写しとなり、両者が一体化した普遍精神(宇宙生命)が示される。ここでは、自然現象、鉱物、人工物、植物、動物、人間、異類(霊的存在)は普遍精神(宇宙生命)のあらわれとして、区別がなくなる。しかし、生命力そのものに善悪はなく、存在者あるいは生命体それぞれの状況との関わりによって、善悪が生じる。生命体無意識には生長・拡張の欲求があるが、他者と競争して傷つけあうか、競争から共存へ向かって調和を獲得するか、矛盾・葛藤を孕んでいる。賢治は普遍精神への一体化という理想に反する煩惱に懊悩し、賢治自身の心象をスケッチするとき、そこに修羅を見出すことになる。

オノマトベの音感(音象徴の意味)を慣用的なオノマトベから帰納して、賢治の独創的なオノマトベに演繹する試みによって、心象スケッチの文脈のなかでのオノマトベの意味をある程度たどることができたのではないかと思う。

(注7) 前概念はピアジェ、擬似概念はヴィゴツキーの用語である。

(注8) 浅野鶴子・金田一春彦(1978)などの擬音語・擬態語辞典の見出し項目を参照した。また、本稿でも「2. オノマトベの分布」に掲げた賢治の心象スケッチのなかのいくつかの例から帰納した。

(注9) 田守育啓(2002)参照。

(注10) 無意識的な生命表象拡充欲求。仏教唯識説参照。

参考文献

- 8 葎阪直行(1999)『感性のことばを研究する』新曜社
- 9 中村明(1993)『感情表現辞典』東京堂出版
- 10 中村明(1995)『感覚表現辞典』東京堂出版
- 11 ピアジェ(1972訳)『発生的認識論』白水社
- 12 ヴィゴツキー(1974訳)『思考と言語』明治図書